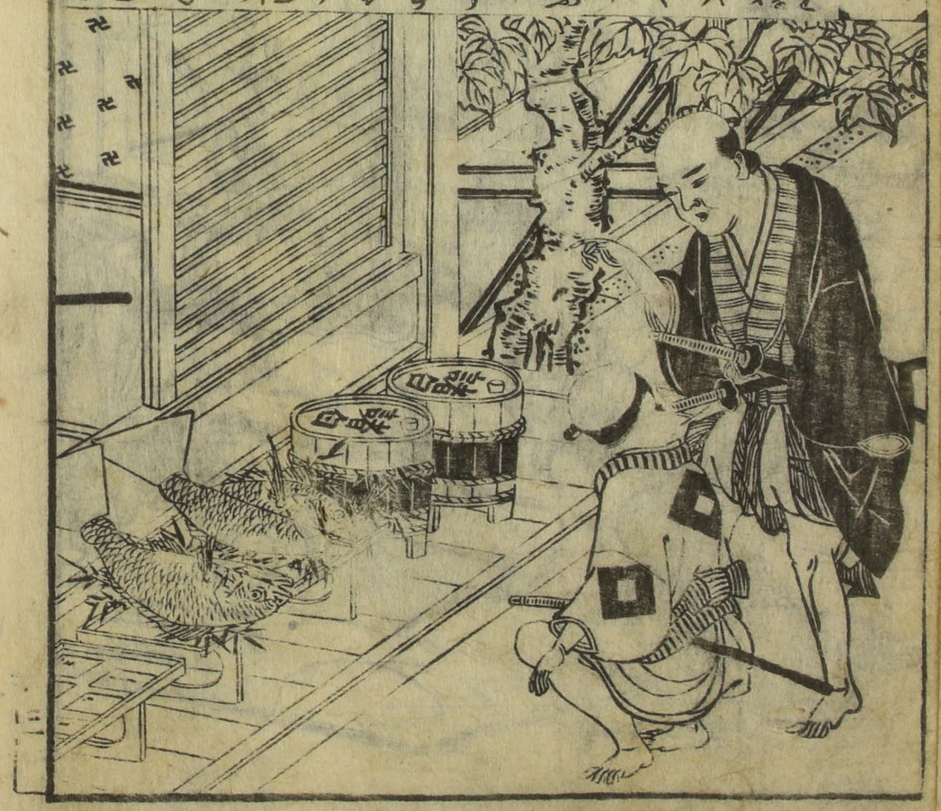
女今川

ロ仁9
2293

帝國圖書館藏
仁
2293
大正四年二月五日寄贈
藤田男爵氏

婚礼の図式

女は世やれ家を出てまの家と
我家とこころ西へ嫁とゆき字は女
乃子は家とゆくなりよるいしてい
まろ父母とつゆ[illegible]朝夕よく
はたらくものをつくべー
[illegible]婚姻は縁と仮て生よ結ぶ
ことなり[illegible]
さまは縁は意の為をさりもす
びあ家をてかくものさうなる
のりて扨は堅を定め男は方の
表を[illegible]を結約とよう
[illegible]分限を意あり五荷五種
三荷三種[illegible]
[illegible]
又荷又種[illegible]
十ヲ 者又種あり或は[illegible]



[illegible]
[illegible]
[illegible]

そろ〻身一なり手淫の真
乃かとむこの方へ物ろそのち
よめの輿といつくなりよめ入の
数さ多ぐの儀式ひるゝなり
ちろれぞも高代いとめんこ
とりつちちとせう志し響れ
の座つきさうづれるのなりけ〻く
金銀の法の〻ゑれるなれも
幸式ふあり〻まりよ乃の
輿ついて侍女乗出むそ
化粧のゑ〻とりのひ物志べ〻
体臭さとべ〻扨座敷へ〻ゐる
さんよめ入ま者とそも座也
むこ客者とそ上座座こ
ま者ふなり座つれ三ゑ
排の〻とべれ次ゑ〻
こしひさげをいつすなり先
よめよりにづをとそ〻むる

なり〻とはかとうけ三まい
むこふこんぶかちぐりの〻なり
此人のかとうけとよめとうて
一こんうけ一こんうけ扨ちゑく
人〻ゑ〻ゑさそ一〻こんつく也
ゑ〻てゑて三こんなりそとをむ
こ〻はうす舞りく三こん
のこ中のかとうけをとり又
三こんのこれをよめふつこれ
よめ三こんのこ中さとの
ゑとうけをとり三こんけこそ
ひこ人はうはをむこ三こんのこ
て扨さひるなりこ且て双方
三こんく三度〻三〻九度と
いとりこ〻ゑくこ〻ゑとのわろ
むこ口伝こいふにいわく
どもこざ来ゆ人業にのべ
こ此さうづるゆ さそこく

五

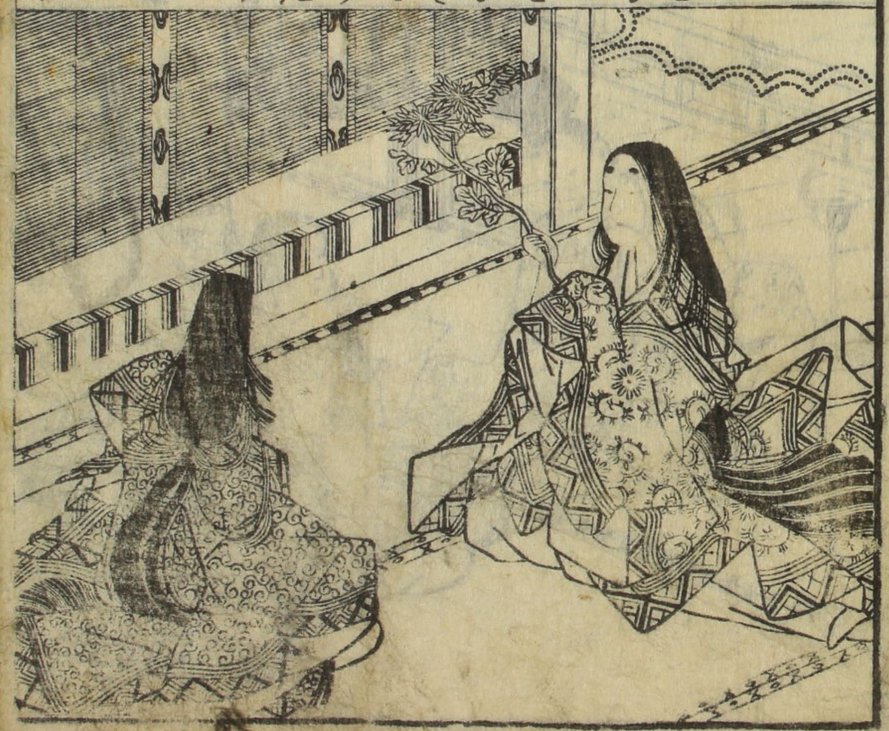
こい
まきの
ふとき
かみ
たい
かみ

ひしゃく
汁
御膳之清の法
一ノ棚
二ノ棚
三ノ棚
四ノ棚
黒棚積の法
一ノ棚
二ノ棚
三ノ棚
四ノ棚
右黒のとり

香道たしなみ事
一香とりてのそぶふ
ムこのうとみつくる事の
ちかふ長さ三ツ
より分ふたんで
ちかふ七ツ程の所
十種の
小ちう 小さ
けいで やうす
今ふ名 名ど
右十一ヒれかふ和程と
いふうちもそのもの
ちかんくまちう
新くふ結ちりの
ちり 風流 余情ふ
かちうちのつつき
げうのもの
ちうふ
右十一ヒ人ふ
ちうのとく

ある男はんの衣裳をこうりきと
今れ女のもとへ行て不くのあらん
わとへて しきねとりこんそそれは
紙をの戸略ををへてつる巳ん
女のこをよみる
いのやきで今なりせるかりこる
つゞ月よりれいうれのんそする
とのひやとんんば男胃なくとみ
うつの住ん
○後冷泉院の治暦月れのうりる
永承教ふとさせゆひ中宮て仕方
なるるす殿とつふ女房とをは日あの
花ゆて まれと伝色るとれつまく
折てまのて世るまて世ちいのと
伊ちれ月六とうの
あれ秋の月れ月のなりせ
みうれ花をつでゆまゞ

君感しさせゆひ物をどゆけ
させゆひるとを
○徳大寺殿つまゞ大納言なりる
とれ月比ふとをきくされる女房の
のとふ抑て抱うりあどせれる
ういつそしんあるさ月れまふく
去生て産月のものをゆふを今て
伝ふとる抑ひれあて肉のとゆひ
けるあしこの産月のきくうて
大内の事あゞとゆんればさまて
あよひい内の月のゆりはれう
そこれのて出んとしゆひるけれ
そうをこれ女ゆうやそんれゆしゆ
殿のあうんれば
うれや夜雲のかゆひ抑ふんのと
んそうなる人やうみと
かくいとゆるけれゆそ抑ふんば

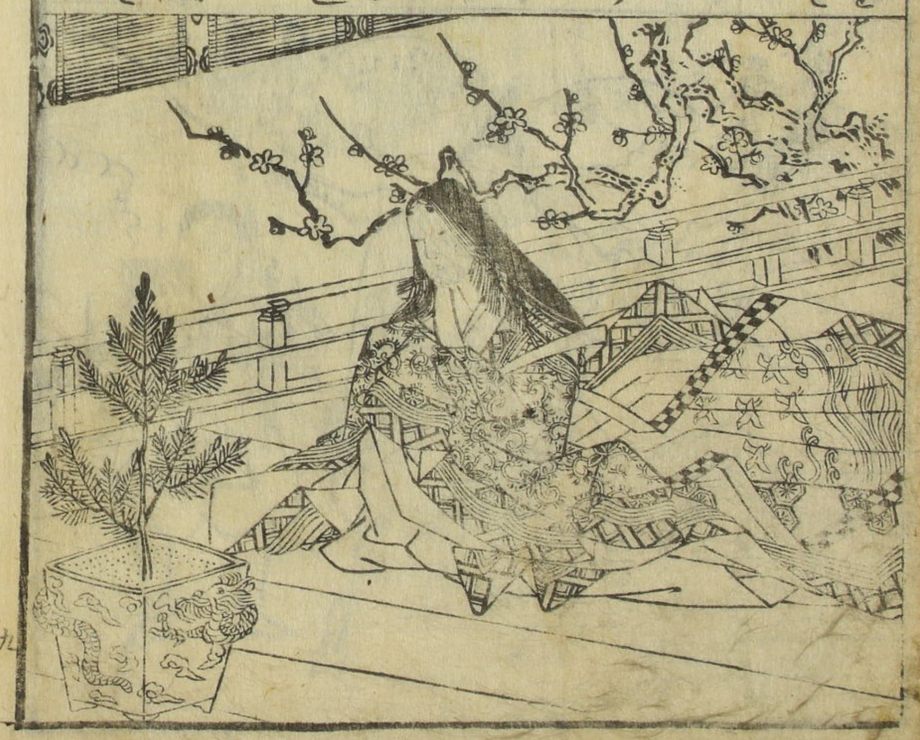


大納言こふめぞ〜ゆうのとも抽て
ゑ〜ちゆゑこそかしせはひろう
○皇室后妃妃の美像歳々ゑ〜ゑ載集
の擬者ゑそ定家々の文ゑそはー
まゑさんぢゑ布衣ゑもゑ〜ゑ時ゑ
ゆうゑゑゑ〜ゑとなりゑゑて妻育時ゑ
まつりゑ〜ゑ接のゑろをきゑん
ゑうゑゑて
ゑゑは
抽ゑろのゑゑ
ひりゑゑ
ゑゑぐふ抽の
ゑゑ
のゑゑ
かゑゑんゑゑのひゑゑゑゑゑゑゑ
のゑゑゑゑのひゑゑゑゑゑゑゑ
めゑゑゑひゑゑ

○小式部内侍は和泉式部女
あり幸女は河よりよく有とよ
ゑ〜ゑ時のゑゑ毎ゑよゑゑく
いひふくゑゑ風ゑ〜ゑりゑる時
毎の式部丹後ふゑぐりゑる
撰ゑ裏り尚者の出命ゑゑ小式
をもゑうゑゑゑよゑゑゑられゑゑ宝
中納言ゑゑられて小式部ゑ丹後へ
ゑりし役ゑ通り中とゑひて居ゑ
ゑゑられゑゑを内侍翠ゑ義ゑゑま
出て歌ゑの種をひゑて
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
まゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
及ゑゑ能ゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑる時君出羽守の小松殿ゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

内侍をめされてれのいのうれ奇を
よのみてをとぶをなんぞーと
ことのり之ゝをべ
ことりや拙てん
いろふ　姫　小まり
多代をべ
君う
ゆづると
ゆりへで
やく梅ーて有ることをべこの松
みどりと生じのとのでくさめ
ゝう君も居やも大きふめんじ
あつりをぞきこゝ

○平右大将宗盛公江國
池田の長者湯谷ヶ女結髪と
ゆ白梅ゝを寄毛ありて右仕



ゆまとり明者れ程の出さりふ
召れてとれのるもそあれ事せべ
毋いてさりありてくるべれよ
いひ世とてなぞあれうしゝまどる
さらふいてるねあり名あるとれ
東山ふさそれ出ものふまつり
ゆふらんをりよやしる打ふ村夏
のしそれおれ橋をちらーしるこれ
侍従ふ尚社いつふと行られ其六
之くちるこる橋をこふさ廻り
を人唐前よりてまつり
いろふをん紅の葉ん
押りんどなまー
あつまん
花やちらーん
宗盛公ここの音ふめんでゆづく
いとなりつゆつまよぞりる

十

女教訓平生ぐみ

伊勢物語ふ田業平朱雀

小野小町

小町ハ出羽郡司小野良実の女仁明帝の御時ふかくめされて美人の名高かりしかなれども奇人なりしかある時四囊ふくろに奇合あるべしとて水を茶として乳をそそぎしー

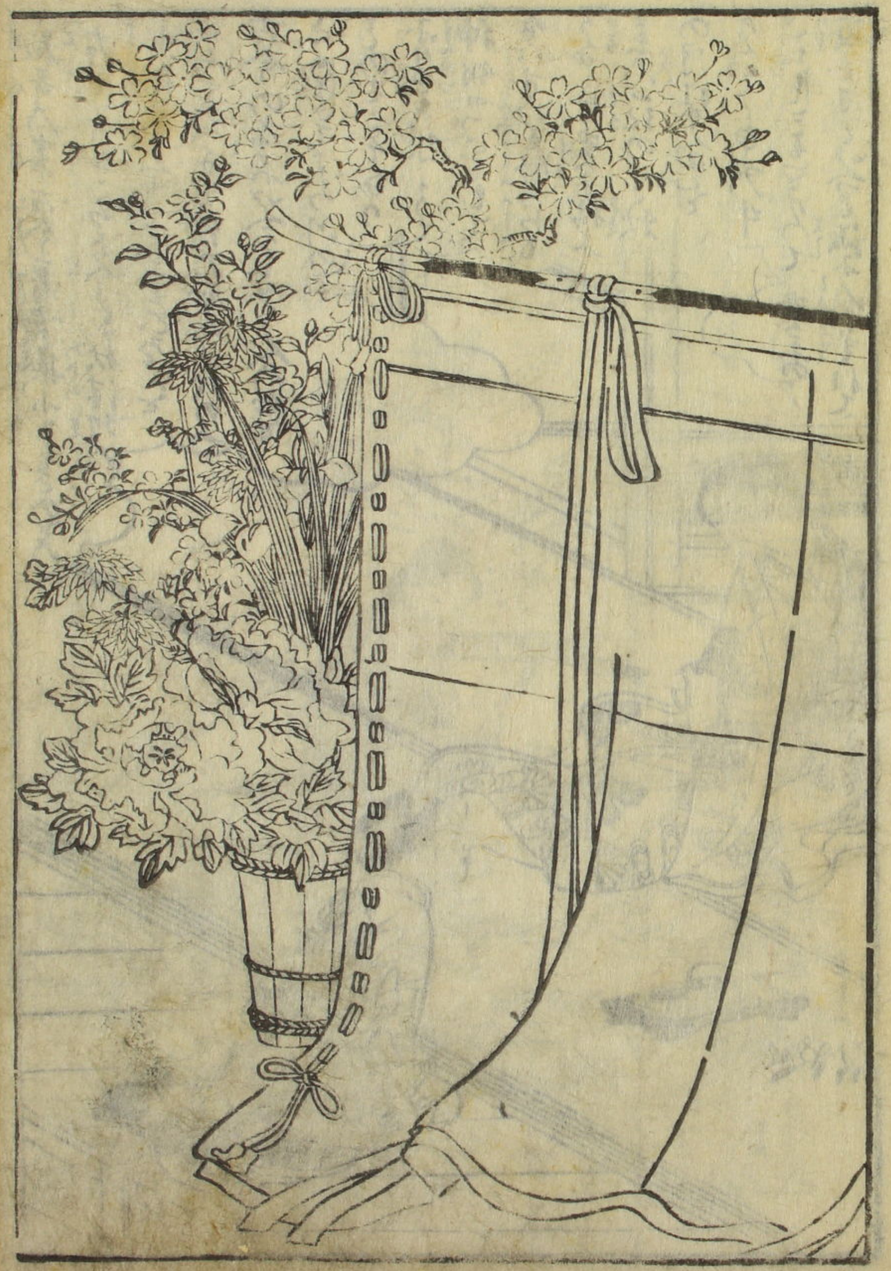
はるかくみ
行水を
そそき茶の
沿のうら松く
おしいもなるらん

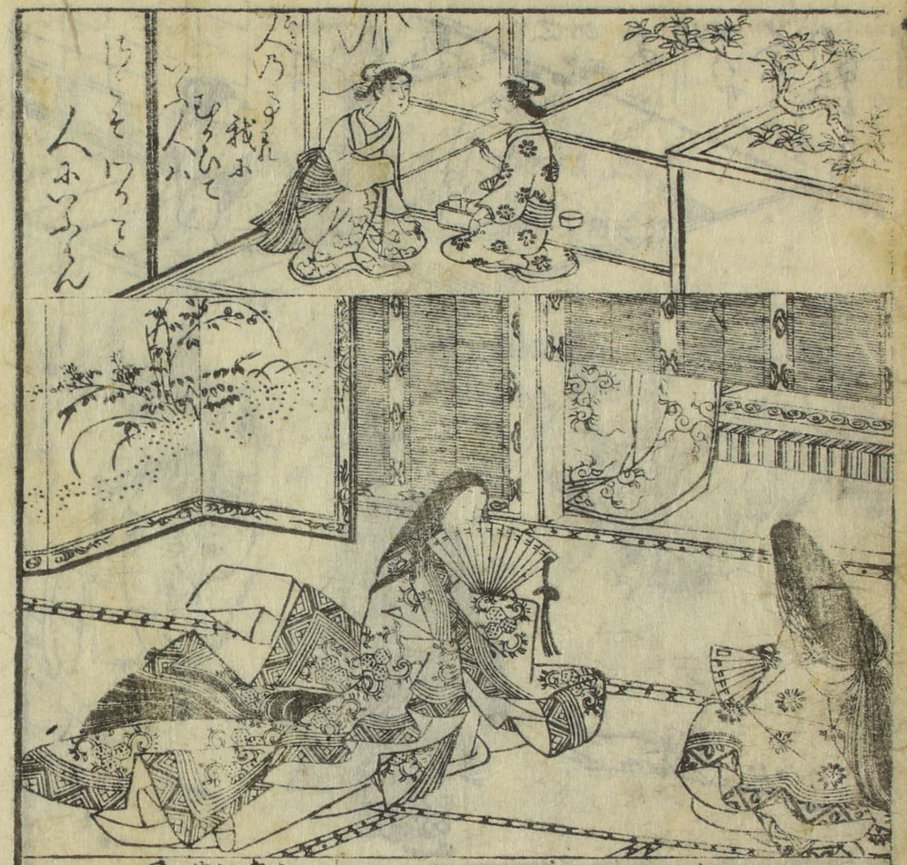
小野の篁

寛嘉三年小伊勢大神宮へ勅使を立られし時毛乗り

天津風
あをれやえ雲
吹とん
くやゆくえ
四乃うらげ
とん

かく飛しなれむ
幣をとりてとりけるとき
勅使なり





大江の蝶

帝ちきこゆ給ふおとこ海しこと江の玉渕ぐむをめとりて
ひとつの車さかくし見ひして
秋ゝ花と行ゝれなをうらみ
ゝうくよもる
涙をとど
かひなれ夏ふ
あひめをも
霞かゝ林ど
さらのぞアをり
帝あいかんあつてけらちき一
かさゝ歯度ふ給ゝうそしちの
のち時ゝ見して海霧垂涙
かゝざを
きり

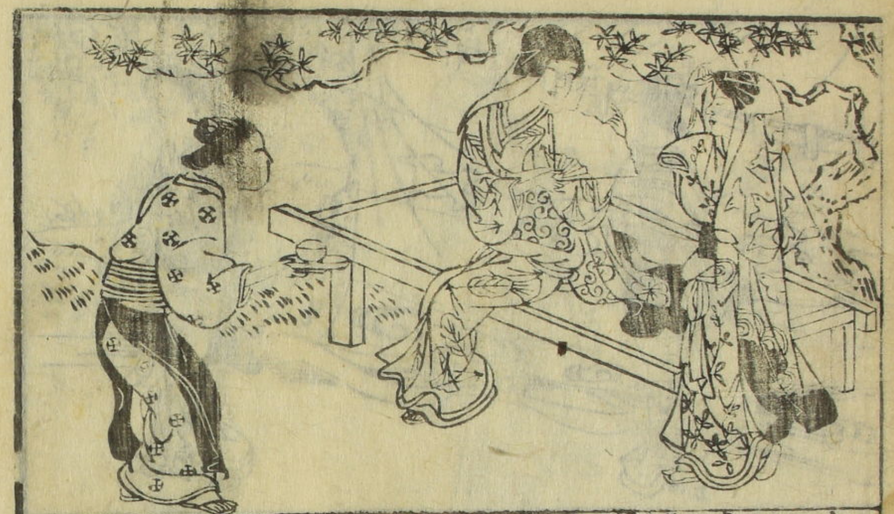
和哥八事古今著歌集ハ
古風うおろそかく秋は列の
ゆて教ゑ方ハ乃仏ちゑの
古今の序ハ人まごく人乃仏を
さゆしてゑ川の
このそこそあり
ふるこれ
神明ハこもて
ハすめ玉賢ゑも
の月ハ人見と
ゆ六中
ゆ賞ハ
友しすと人と誘ハ人とすして

哥乃道ハ
ぐなるべ生を
あくれも世乃
うくきず社耳ハ
仏ハひと
時ハやそ乃ハ人と
ゑ者ゑあり
ゑハ中ゑ人の
ゑて人の道と
乃ゆゑるハ
ゑすしハ
行乃事ハ師もあり
ゑ人ハ
ゑる乃ハ勅撰
和哥集ハ林葉
哥集ハ

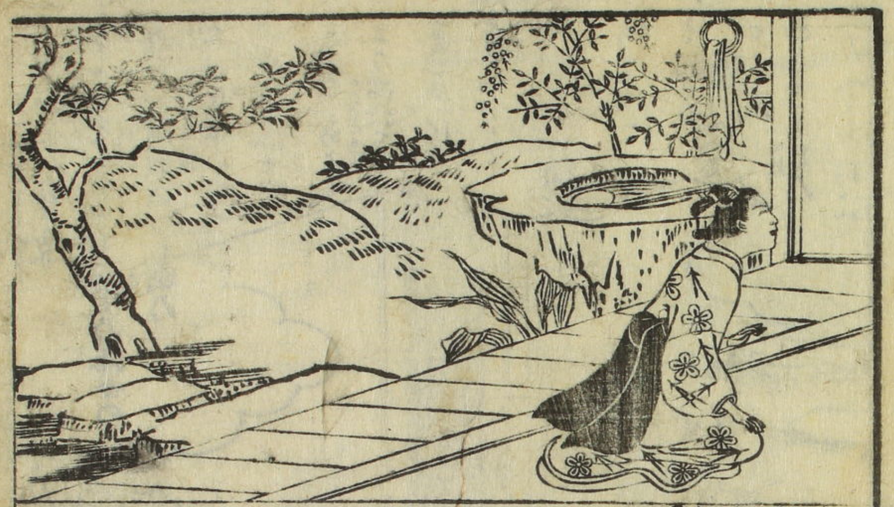
女風俗候時

一 扨も男女ふかさしだいの風俗と云ことは人の
裁体神代の末とうしろふ直神天今を十四年ふ男女共に
そを深多とぬぜしれ又正大今を三年ふ
つくらわりてお年の時八猿明の袖十長く男子八十あ
扨も付氣ふうまてをのづから深もとふくらしてうや今時八
栄るこの田舎そこの姫も玄の風とまつくふ風俗格
とのあるこの茅れ結びめふ氣とつけ脇付ふ仁のくり後
歩行ふりふ正代やり法燒海千も睦足代袋くきておや
田子のうしあるまかげも生れるまこ紀て祈く

かりてうしろふ風俗と云ことは
ぐこそこの者時後乃代不ぢ人し茅基衣れの男
あるのやうふふおどふ紀て云あ人ぐ子ふ云ふ
やきてうふふ云ふ年八彼よりあ人ふりをてろ
うしあきてうふ彩ふふーら云ふ云ふ彩まる人の中とれ子ま
見みふうーの風俗八人ふるあく妻女の風俗ハ人く
べうんで衣れか上代風のあう今の風ハ初ふた
ふるあーにてふ人ふ彼よ氣あく花束にふ
今いふくの祇ふ仕ふーふん掏ふ茅ーの乃ふむ下ひ掘と
ふふふわわ庵孫の夏服女ふるん代ーてえハふれーふん
ゆりそうーえ男けいせい花女の風服ふ色ーと京のふ
ふふ彼ふふ織乃風といふ可え女のそんさいなの代ふ
庵柱ふふ一祥と云ふふあふ妻のハさの
ふふ一ふ人ふふ人ふ吳ふ乃ふーふふ云ふ
ふふ云ふ人ふ風ふふ人ふ云ふ人ふ中の



わかてをひとけしてとゝ〳〵んとをあて公ゴハ兄〳〵
とにめふまてぐとぐ〳〵ゆ〳〵公のゐけをわうしゐ
来うきたなぐ〳〵てこぐひのゑ句せうぶぐ紗これ、
うゆかまてちりて人の目よりうこれハまた人のまうゐ
そやえるゆなる女まうゐ〳〵こうハさわゐ〳〵紀そゑ二
てそ〳〵しどの四方こしいごゐそこの目長女乃所
ゆかぐ〳〵いろ〳〵はろ紗ゑ方のせうぐとハえ〳〵ぐ
こぐ長の方ゐ〳〵ゐ紀文阪ばうゐ〳〵ぐばひ乃
こゆふもなりいるゆきせ乃人まろわきこう
ゆはしくうれ名のけともうゆやちん心はこそ
よく〳〵ゐわどをゐけ才一にまゆひてうにも
お物所縁りうれどふれこまいするれ左ホ乃
ひ名付ゑハ公合男の方〳〵のゑけど手てゆ〳〵
ゐゆゐ〳〵ゐくゐ〳〵ば女中ハ夫に紀とうけゆゆふ
ゐを魚深く公ゐけゆ〳〵せふ三十二桐おおゐる
天性の英人とゐい陣七ゐい公を付才著おゐそゆ



立ふるまい風俗を才一にゐうけの人前色と英
形そゆゐ〳〵そゆゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵

一

今川よりそうへ女
いまめ像
常の仏さま
唐日
ちて女仏

男女日用 田項草

人間の男女とそ分れるまへ大切の儀を守べきの堅法の一つより一切何とにきても堅て志りと要めるやうの義より彼釋迦其乃住かの天竺国とい堅といつとと婆婆とい何事も堅事とい称ハ世界ゆ人毋婆婆世界婆婆の浮世と我も人もいとおれハ堅乃浮世といふ事とハ人ハ其訳とハきまへたる人乃難しきとハ堅事ハ守りとと

不殺事

男女共無益の

寺へまいりと

[illegible]事

者の人乃書ゆれし言乃葉ハ確とと書ハ世ハ乃しし話なとと今ちたに乃ち乃書ゆりて教ゆん

夫女ハ世ハ乃家ハ乃時ハ父母の仰ぜに志ゝたひ嫁ハ志ゝい夫舅姑ハ従ひ老ていまに従ふが道乃是

小ゝ事とも思

ゝ考ゆく

何ゝ小ゝ疑

ゝ[illegible]事

則ひんでとも堪忍にあり堪忍
父母を理かる事と称ら〳〵
時のべ夫いと云とは何ども
まり頑者ゝ云て孔清を
やとて足すかつら従の道ゝ
けん其いや夫いと云く云を
ぎりに相て此くが堪忍し

一

一大事とも謂
べく我心うち〳〵を
人に知るる事
なく親に孝源な

○右乃やう教とやけまべ
ある人のつまはれはつきて
氣が短くこ理しまりしてい
其堪忍ゞでなれませぬとゆん
けまべ初へ氣が短きとや
其短き氣とゆへ何人何す
あるう俗ゝ人せあれとやされ
けゝ此道者みへまりしとそ

一

堪忍を忘れ忠孝
の道に外る事
夫を諫めず
踊ばかりしてゐし

○氣といふ人の氣へたとへ
釜にて水を煮れば湯となる
その湯のゆげは則氣なり
形ゑんにて氣に成るなり
人の氣もかまに同じ性質
あらば短き氣は何天長き
氣は何生と定り有べからず
氣も短とのみ我生を育かり

一

天道と不忘事
道ふ学て業を
怠ることやみ
祈ぶ事

○ある人の女房妬て風乃
ちらして病の床みなふ
いろさまぐむりしきことにも
おして時望とえりまて髪の
毛ろ乱まくると深さうに
なりけれ共今りや人ふ結だせ
だや明るい夜あげこせ人を
ねりとしむみまを乞ひる日の

一

西にうく嘉
ばもれとうる
ひむ事
接ひよ長ど成

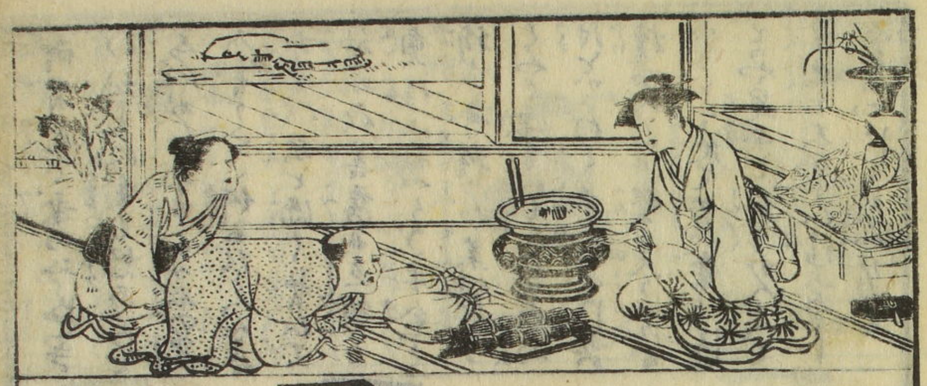
或山小暮み其家乃めし仕
十七八の女ゆをし出を掃
墓の枕病人の枕もとを
掃ろうて枕元の塵芥を
如し病人の乱し髪に櫛
付ゝ髪をきあうて為ぎ
をみ潔えとする也とを乱し
髪がしい其所此所とを入
ひつうう様ゝ匂い家
丹満ち病人も丹ぐろきしい
いのうう生ろうぎ乳力
なくて口いはさるを延
頸と拵しろ髪毛ハ強ゝ
燒きて尼法師とゝなるだく
成ハ下女ゑい乳もそ

ぬき四ゝて惟なくゝ
かかりきむさあるべき家
なり家の主をしぢ家内
えさいきりると病人をを
制ゝ枕とあげて主ゆむひ

あざけり
嘲を不恥乎
女乃精利根る
遠い為事に
つきゝ人とゝ乎

誰しも相戒あやまちと
好きものこそもる者あるほど
つるが相兼も倒すくだし
されべこそ今彼女を打擲
責せや情人と味付
邪とえうけ楽をくるめ
たのしてあ自ゲ髪の今乃
間ゐ延ゐてもおうたし
痛ゐ邪くく髪くろ粧にも
おうさ程バ自さえ不寄ばれ
人ちゑ流来すく病乱せん
性まで日をくらをうちゐい
髪もく人ねるし只程伝ゐ
ちく楽ゐいい後とたーかめ
よ心れ去ろ遊して只く

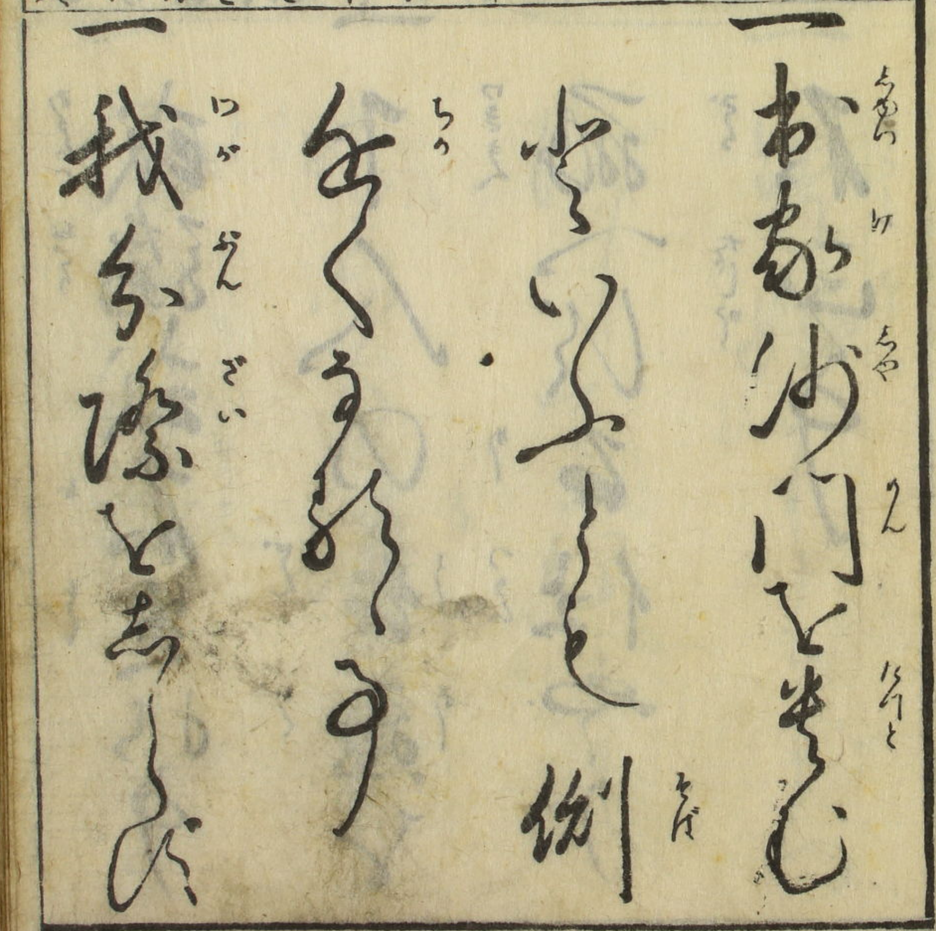
人中ゑ式金て
をよ結をいく
身と楽ゑ
道具衣裳世ゐき



暇ゐ羅にてる
ゐ乃ひ見若ゐ本
貴ゐ紬ゐ世乃
ちつゐき事を

御宿先と妻の中色き
ひがしんに主も怒あるを
きづかるる下女がんの中ら
の貧くさき何ぬたくんを
かくし慰と添く祈りひて
神明仏菩薩ぬ願し
奥様にのつきこ米金と
祈り奇特しく業ぬ
こやく涙ぎいんしれ方に向
日とかさわく米金のしべ
焼かろひし髪も入りいるる
ひくと起て昔に寄ざ
とろや笑ふと絵くひんて
堪忍と云ふ心い絵ふる
貧ぬやしきんかり

其時下女が年十八歳ぞり
夫ぞり居眠ぞりつ妻かく
飯ぞんぬ起さうぞ事もかく
盗賊ぞろと隠て主人と
大切ぬ祈りん敬ん申しぢき
んと盗ぞ左右ぬ乳ろ仏
妻かぐみぬ銭の移ろぞく
夫婦の四つぞおくに仕へ



けるに主人も後世ハ奉公
人をなをざりにして
光陰矢れ如くをくる
不手の業とぞむくいられて
縫針乃道もかこく覚
神妙な物でしやうきと
ふく入るくく嫁ぬを
世ゝ紀ぶいふをの考ろき
えうう仏下女ゞ父母れ仏も

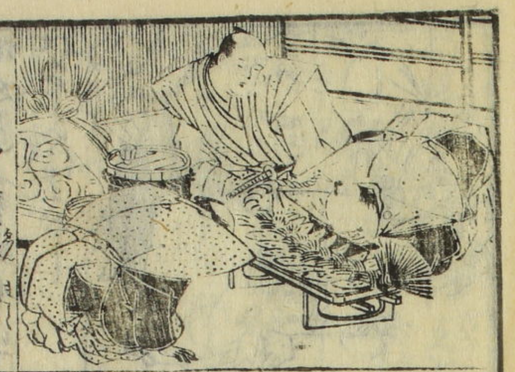
或婦式不足ゆゑ
下人の番頭を
頼へびる仕やう
不正ゆゑ

嫁入ごろと甘しいれを
主人の情あれきれば定く
楽が舟の中ばきこれ仏ゆ
あるべと甘ふゆ遠なく
或時下女ゞ家とゝば
主人夫婦ゆさろやうハ
其方の親ゆ[illegible]ハ
相無ごのやゝ情の詞を
感ゞ思と為ゞ夫ゝハ

渭如てまゝ
けて[illegible]て
抜ゝ志ゝ溝ゝ幸
縫子に染ゝ

奉公の志こそ世のたぐひも
あるべし余り神妙なる史
抑節ハいづれ立理とも
いひ難面なそなしまる
時しをありけるでにかの
嫁と立の親父も人とも
おぼろき入さる仏底史
慶喜夫として家屋しき
一箇所にうたそ記文
と二親み結りきれば銭ば
ばりなく仙今しき聞と
聚れども女ハ一番のこ
ちまだケ紙まだ方ぐ
ま人のれこ志とそ
兼恵ハ人と連添ま

他人はあざけつると
恥ざるまま
男女るにハ親親
者ハいふ
歟



かしていふべ級ハ加ら
出雲の神みはんだし
なして来こすすぎるを
奉公とにしめ妻夫史人
其家の付頭の妻みかり
をしこ主人の差図を
夫婦となり家富さ久

親ぐるすと
家ふ勝まるを嫌ひ
地ふ主て酒を
出すまま

子孫繁昌ちく今の世まで代く絶ていつ本町の中の用出茂様ちゑを此人の家とや是ひんぷんよりかう幸福と得ちうほとべちと幼稚ちゑよりを堪忍とつゝ事とかけて仕ちゝ仕ちゝ

一人寡の母を対ひ家ちゝ
対しいちを
うゝ孝行の
者は多く常に

○堪忍とゝバ腹ハ立とちゝ人ちる事のちゝ事ハ
ちゝ人ちゝ事ハ何事も
一切ちる堪忍ちなゝバ
花見ハ紅ちゝと散ハ
陸ちる人ハ其行ちゝを
堪忍して止ちゝをれば
すゝ事かう

女の子ハ
ちゝ
ちゝ
不孝といへども
ちゝ

それ夫と足非ゆるふとゐを
柄の角のと詞ゐ多く
脇乃立やうに成ものゝ
類にて仏乃内に詠ぶ
事のかりけいぬ業ゐハ
我ごろゐ身てゐるが
よし足ゐ云出ても出
来まじ也却て来へ彼の
場ゐとゐ出ゐて
出ゐわがよし我勝るの
よれ来ハ人の勝るにハ
あきゆゑ我甘ハ伝ゐハ
させゐ道理なりたゐハ
十ゐ物と云ゐ者ハ我
よけまゐも人ゐるゐゐ

先家と申へきゐハ
世一慈悲源く正
事ゐ
こゐ詠ゐく歩
天陽ゐ

強く地詠ぶして
初のなり志るに
詠ち湯ゐ浴ぶゆ
天地自然乃道理

○そもく腹の立てれば
来と考えるゆゑ
我身をむなる道理と
いふがうにも理とつけ
人の非とかぞへあげく
はりくなるにふして
我身をやしく成
其儀様といふのと腹立
こゝろかうねいて仕まい
胸がさけるやうに結と
いふ是ゝから喧嘩口論
なり物して来い来乃
出来るハんやうく勉
するゆゑていい出た来
なれば言勝なる其跡が

あるゆゑ小夫婦は
みちを歩よだゝへ
ふれて夫と天乃
ばくうを感まい

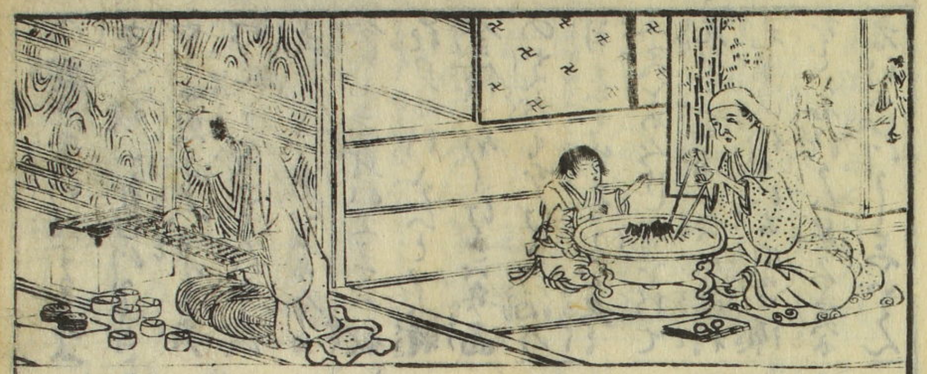
左右方ゆゑをみちくけて
すまる物ゆゑ仏をすれ
人なら嫁とかゆて中
かとうと有もちた方
堪忍して入ものの如く
仏やくなるゆゑれば
今ゆゑ成てもる堪忍と初
堪忍とすれば物いひ
すい来くかんぐ結ば

ひ堪忍堪
天ゆゑ無と来く
菊物と生ぶるよう
失を生ぶ無生

○小柔時頼殿陪侍し
結ん入道ちく最明寺
殿とやせしへ歌人にて
新千載の撰者百首を
ゆめゆめ堅に堅
乃弄に
我しれ人のあきゲ
あつバちて実し我
分も若へかけまど

道を仁義礼智信
乃五常仁のまも人の
約束きみちかまー

実ハ此うちのちく我
分とのつ乃をバ人どう
あきめハあ〜ど我分れ
上ハを何ちく〜あしき
事も有ざし心ハ
めバして堅ハ
ども
ちく
ハ仁乃
道
ハ
紀
堅さ
き



歌一首の歌

我身さへ我ものにも
なるわれと人とものいふ
ほどなきやハ此身と
隔てゝいとゞ我がゝらだて
貧乏の癖きハ其所ゆ
よりて我ものゝ如ふ
取ゝゆハ多がゆきなる
事あれバ引てゝ人の
心くなるよゆ世の中
と取まぜて我心のやうに
なるハさ道理と雑へ
ものうて思ひ取ゝ自由
ゆハなしゝねをのとゝ心ゆ
ゆ人ゝと仕ゝ人なし

友よ変り俳諧
にて猿がゝ引き
ともゝは通ふる
べしゝみゝゝ

貧乏ものゝ
ゝハ若魚の友よ
ゝい〳〵ゝ
ゝゝ乃

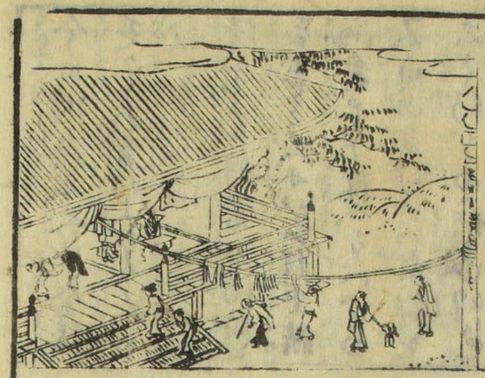
○親孝行にするとは
幸と孫のかむけりき
やうに思ふ人多し
はなし六ケ敷おしにあらず
夫
にしよりは今日
食事さへ所にしてハ親
和男ハ[illegible]と以時
金銭ばかりけとハ兵商
のせんかもかけとハ酒の
用意も出来ずと名
工夫とめべし肴とれて
凡ら無物に大なる徒利
元要の代りに古風品種
などのんびり足ら美
孝行いもりしやいん

ゆへ家とよろく
しかし女ハ正しき
とゝ以ち美
家とよろ女ハ

今日相撲みんし金銭
多うしわ分し上なり人ハ
親くるんゆうふとあれば
持合ろう辯當小酒倚と
取出せとんゆいん付重詰
酒肴ろと揃へなにひろ
不自由みけとハ親の供と
ちく約でる何もりし
き業ゆくハ有きこと

えすびの成
しきを好し
ふしく人くゆ
傳ちなり日ぶろ

又貧賤かつて親も歳
老て只も弱く花見物
まいりをんなは世話
焼ふるとらまさかに
貧かしして行もあるべ
是皆おそれりき者
行なるみなをこいた



心不ノ口者あし
きをたら者ふ
ひとを身を
治ること行ぎし

茶ゆえいとせ〳〵今日
何不自由なく身をそ
別ゆ親孝行の仕やう
かし〳〵只よいけとい驚ま
ゆて供して行でうゑ
何も六ケ敷といあ〳〵じ
ちうと孝行い出来ろ
やうにいい物〳〵なりをそ
ゆしけも不足なくて
今後の有ゆは世何を
学ふ彼が然らと有上ゆ
教ゆ去のをとふゆ人父母
おれを制すをば肢を立
ろと言をいい出て逆らふ
人多〳〵是を不孝とふ

ものは家ハ
ちと守ゆ
れば先ゆ者の
ぎ 儀他法

一ツ
同じ者ゆえ
一族の
ものもしは
一歳地ゐ

せわてい孝行せんとを
親の心に逆らうべ世話を
やらせねばとて不孝なき
身の孝行い新より外
孝行乃去やう有度
けまへひけしき事ハい
あらんと古き人の詞も

に我身乃
行為よこしまの
ものを仕法
ものもらから

其おやくゝも世話ばら
せどゝ心も遂らるやう
さてうがけふ事は是まで
ひいしき事にあくゞう
堪忍といふことをとりきまへ
志終べ歌おやかきてゞ人も
世話いやらせね道理ゆり

ざるをひふは
俳事なるへ
人ふ為の理を
うけて生れうる

○ある老人のやさうへ
世に合点のゆゝ事あり
奉公とゝ十年二十年を
もとむるハ堪忍とゝく仕
覚ゑ学べ勤まゝ物ゆり
娘のゝハ十四ハ家まて
歌のゝえも居くまゝり
嫁入ゝ祭祈とをなく
さゝ終てハ片付をん付
ていみさらゝ娘ゆり是
堪忍とゝ事とゝゝと
又ハかり去もてをとれば
其後ハ近祈をかり
一家一門ゝ二ハゝ時
ゝ堪忍いゝゝ去ゝ堪忍

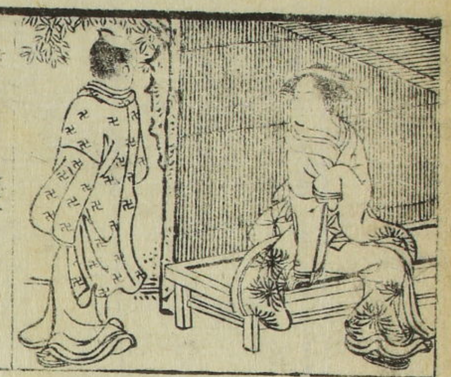
こいへゝ成ら
若人ゝ成家無
人となりてゝゝ
ゝ幼ゝ

たてからくやう詞もかく
唯とうぶき所第をを
塔婆とてかるを合点
ゆるぐ今すう塔婆と其
嫁へかる處をて叫んん
ちく詞もなくしとうの
むき居るゆべをるくにい
みぐはきじとやされまる

らけ義にるへ
とふ男子てを
仰をとをを学問を
はをめさ分者を

親孝行の志あるを
よみまる歌
何事も唯おいて
きて入て歌の紀み
いろやうが孝行
此うこは何人よみまる
作者をくばといへども
あうがくを詞ゆうやう
ふんげ歌みたる時い
けてもいうき業
にいるばとを安く思へ歌
孝行と仕なたまを
世の中すれなうるをく
うへあれば忍のきを
子孝みたるを

おとむ
治ふ道となる
しひるを有と
いへども女子は
しゆへ帝



○世のたとへに言ふもやはり
定親といふ人幸ひ世たる
物をこん競みすまべ世を
えへめといふ譬より悪
事とちくさを悪人とも
事にしていふ時ハ盗して
を人と殺しいせわといふ
ごとし必　芸居をえて

ちかぬ女ふかく縁
をくて他の家ま
もり夫ま寄こひ
湯姫ようちち

不義いひらんかぎり
などとも本ふし結ふ事
かれ女ふい貞女とも
ずして義人をえ夫ふ
長らすれ法きと世間の
人ハ誉ふ称ふそのこ

べき事なれど
親ふ知るとぶもふハ
婚ふ
ふ

中むらしのおろ京都み
夢窓國師とゆもか
智識ましまして狂言
と謡く云ぜを海色
諸國ろ師しいとる
時の藩屏の城下姫路の
町て喫茶むうて人く
五さ死者すまどとん
右方きへのもどでながら
屋じわこたつみ合きるが
一人の男國師とん分て
智とうけ相よめじろん
云やうしけんくと暫
きて國師傍み堺非を
用分てかい長うて

うべし況や都と
海ろ人胡女の
嘗あ法く云葉
と聞く西ろ人

理の悪きを詰めて
たゞ左方得んして
国師の系を懸まゞき
だがしゆ理とつく事を
国師き結ん宮ゝやう
物ゞて宣死口論事い
きハ一方分を理ゑれば
妄理と知りていつかを
絶くいきとゝ理非乃
分ゝ者ハ絶くをえべし
こやうの者ゆ死の如ハ都て
理の方ゝ負なり左右方
ゆ一理ゝ有て時の拘
るゝく詞をハ来乃系
後して互ゆ事ん理と理

ゆく押へるゆ事より
論とかゝと考こゝ宮
是と宣死とハ是左右
方一理あるかれば誤ゆ
ゆを及ぶ今より後い
宣死口論をして脇乃
立めまゞかん短氣やむ
堪忍の御符と接べしを

あるいは家ゐ立ようゑひ
硯をさしをさらくと書
たるてめ五人の者ゐ接て
立さう給ひまる家乃主
其護符とをに取て戴
拝見すれバ護符ゐて
あるで一首の狂歌とで
書たまふよみくゐ人給い
在の人乃ゑ理と
道理を聞かゞし
我理といまだ
うけむいて居と
誠ゐ是ハ結構ゐう護符
なりと此奇のごとく我も
相よるもかゐうに心ゐ存

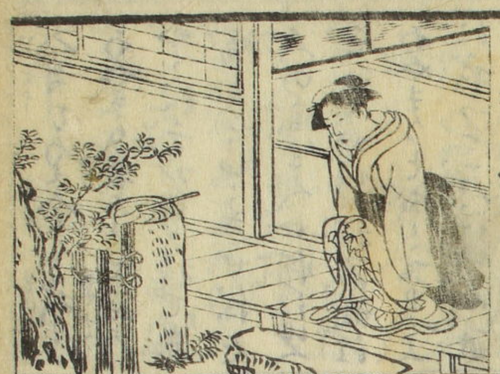
人は誠を為ると
ならぬべきかはいち
人の生する者と
見くらべて我ゐ

物ゐ争ひ口論けんくを
出すべゐを則かんゆん乃
理ゐかるひ短気と押る
基なり有ぐゑ御符
かゐとんく感ゐして其
ゐの守護ゐへるて書
写し諸国にをてくゆー
をるゞ今へむりゆ成て

徳ある者と好み
にのれ
ならんとまる者と
ざる
不好ハ貴女乃心
ざる
他ならいべで

ある人まねをあそばせる
かゝりの有りし所なき詞
あく理といきまへ人を
唯柔和めして逆ふこと
しけを女は殊更をの
ゝくしたがふべし

○誰身の上あを我分
の上あを時の用ちゞ
了覚遠まこい言葉の
跡さえ剛下を言べた
言葉い用そこひい等
を物いい柔いおこる
事なり塔無いかて



八月なほ今く我ら
あやまりと無きことと誤り
やうに云かけら移て其
場ぐ云ひらきせ称を
人の耳まへ口惜紀也
云ひつれば我不調法
あやまりと成と恥上
に我ちとたれいん底
なる者ぞいと我と
我身ハ我心ぞ理を
付くん人の耳まへを
ありを慎一すぐ
思い結ぶ場を場所を
ひ事とひもろ少ハ
口論いさうんと成う

無とも
思ひ
思ふ

知ら
読人
ひ
ふ
ぐ
ぬ
ぬ
ぬ

譯すれば詞多く
るしでも筆しなりやう色
に無ひ言葉もせば
誤りといふて其座あと
ふまふる仏座ねく
堪無ぢうきんかと
考ふ又智恵なれ
者い其人の平ねれ
善あしをんれ縁ば使
其座の詞を聞く系
後の考もなく善あしの
評判して徒ふて誰い
誰と言諸こ誰い徒く
の勝脱で一言もおろし
なくふやうか智恵

世の中てもも
濁らと仏れ測の
あれかげ様て
こと思い無者

無数多の人を
石佛ふの大こ
日月の事本を
照ふがごとに

達乃ゝ事ハ構ヘなし所詮小児のやうか人達ハ相撲をみせぬ氣ハ成て事を海とゞ上是堪ぬの近道なりたゝ人ハ十七八歳なる人ハ五六歳の小児と相撲をれハ大人ハ負の小児ハ勝ふ大人ハ智恵あり小児ハ智恵すくなけれハ勝又ハ五六歳同士ハ小児互ハ負ト者ハ力をはつて事ふハ左方ゝそう智恵なれハ人ハ強く一人ハ弱けれ

是乘慈悲乃仁を
めぐらす人ハ
活ひ活ひ仕ふべし
少も勝負ハ
[illegible]

事ハ理非もなくなど
左右方一理ばく有ハ
事ハいとなる智恵ある人ハ
理と理ハせば其時の不
よく事の取ちがまを
肝要とする是もすかち
堪忍より出
理の強ばる
理強ければ人ゝの意
恨ハ知ハ人ハ我ゝ強安
ばく是理ハ人ハ知ちゝ
なる人ハれば小児とすま
取ちゝて是理ハと
勝しそなくと世上ハ人の
却ばき人と考るに

[illegible]
あざけり
嘲を得ゝ
[illegible]
偏る
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あべやなれいはんの
道とおんなげ絵く
んゑて申かしきんみ
成るゝ屋しりゝ六十の翁
用つくれし書とおに記と
日頃草終

昔しもべし
嘗しもべし 誠
かく清ぶし
女今川絵

文化十癸酉歳摂行

京都書林 小村四郎左衛門
江戸書林 須原屋茂兵衛
大坂書林 加賀屋善兵衛
河内屋市兵衛